①パーティー会場『ホール入口』

ローラン・デイ・クロスが会場へやってくる。

ローラン　「随分と賑わっているようだな」

クロス　「ここまでとは思ってませんでしたけどね」

デイ　「本当に。予想がついていたらついてこなかったわ」

ローラン　「おや、そんなにパーティーは嫌いだったかな？」

デイ　「別にパーティーが嫌いってわけじゃないけど……
大体私までついてくる必要性ないでしょ」

ローラン　「必要性ならあるさ。一緒に楽しめる相手がいた方が盛り上がるだろう？」

ローラン、デイの肩に腕を回そうとする。

デイ　「大した理由になってないわ」

デイ、歩き出す。
ローラン、腕を躱されふらつく。

ローラン　「待った」

デイ、立ち止まりローランへ振り返る。

ローラン　「どこへ行く」

デイ　「どうせ、この後挨拶回りとかでしょ？
それにまでついて行く気はないわよ」

デイ、再び歩き出そうとする。
クロス、いつの間にかデイの前に回り込み止める。

クロス　「お待ちください。これだけ人が集まっています、あまり一人で行動するのは控えた方がよろしいかと」

デイ　「クロス、あなたまで止めるの？
別に大丈夫よ、勝手に帰ったりしないから」

クロス　「いや、そういう事ではなく……」

デイ　「でも、もしも何かがあった時は迎えに来てね」

デイ、その場から立ち去る。

クロス　「(溜息)……」

ローラン、クロスの元へ歩いてくる。

ローラン　「まぁいいさ、好きにさせておこう」

クロス　「ですがローラン……」

ローラン　「そんなに心配しなくとも、彼女はそんなにヤワじゃない」

クロス　「……一体どこから来るんですか？　その自信」

ローラン　「私の元に居る時点で彼女は『普通』とは違うさ。
君もよくわかっているだろう……？」

クロス　「……」

ローラン　「それより、私達もそろそろ行こうか」

ローラン、歩き出す。

クロス　「(溜息)……Yes,sir.(イエッサー)」

クロス、ローランの後を追って歩き出す。

②パーティー会場『ホール別場所』

秋愛・騎冬、並んで周りの様子を窺う。

秋愛　「では打ち合わせした通りに、調査を始めましょう」

騎冬　「……なぁ、やっぱり二人で行動した方がいいんじゃないか？」

秋愛　「この後、私は会場内で行われているイベントを視察してこようと思います。怪しい動きがあるようなので」

騎冬　「おい無視をするな」

秋愛　「もうっ、なに」

騎冬　「こんな裏の人間が集まっているパーティー、どこに危険があるかわからないんだぞ？　二人で行動したとしても、悪いことにはなりようもない」

秋愛　「またあなたはそうやって……私のこと、信頼してるんじゃなかったの？」

秋愛、騎冬にゆっくり詰め寄る。

騎冬　「うっ……わ、かった……わかった。二手に分かれよう。それでも、何かあったら必ず俺を呼べ。いいな？」

秋愛　「はいはい、わかりました」

騎冬　「お前……ったく……じゃあ、時間になったら合流な」

騎冬、その場を立ち去る。

デイ、秋愛の傍を通り過ぎブローチを落とす。

秋愛、ブローチを拾いデイに声をかける。

秋愛　「っ！　すみません！　これ、落としましたよ」

デイ　「え？　あ、ごめんなさい。どうもありがとう」

秋愛　「いえいえ、すぐに気づけてよかったです」

デイ、ブローチを受け取り秋愛が隠し持つ銃に気づく。

デイ　「……(気づき)」

秋愛　「……あの？」

デイ　「いえ、なんでもないわ。ただ……あなた、まだ日が浅いでしょう？」

秋愛　「……え？」

デイ　「オートマチック……というか、銃はちゃんと隠さないとバレちゃうから。……今みたいに」

秋愛　「……え」

秋愛、デイから一歩距離を取る。

デイ　「あぁ、ごめんなさい。これは愚問だったわね、忘れて」

秋愛　「え、あ……えっと……」

デイ　「(微笑む)、困らせちゃったわね。ところで……あなた、どこかに行くところだった？」

秋愛　「え、あ、はい。
　会場内でイベントがあると聞いたので、見に行ってみようかと……」

デイ　「そう……」

秋愛　「あの……なにか？」

デイ　「やめておいた方がいいと思うわ」

秋愛　「……なぜ？」

デイ　「あなたに……人が死ぬ姿を見る趣味はなさそうだから」

シーンチェンジ。

③パーティー会場『廊下』

騎冬、落ち着かない様子で秋愛へ電話をかけている。

騎冬　「……クソッ……！　秋愛、なんで出ないんだ……！」

ローラン・クロス、騎冬がいる傍へやってくる。

ローラン　「さて、ひとまず挨拶はこのくらいでいいだろう」

騎冬　「――っ！（ローランに気づく）」

クロス　「(溜息)……組織のNo.2も、中々に大変ですねぇ……」

ローラン　「はは、まぁそうだな。……そういえば、デイから連絡は？」

クロス　「いえ、オレの方には来ていません」

ローラン　「そうか……なら、一人、自由気ままに過ごしているだろう」

ローランのスマホが鳴る。

ローラン　「……おっと、すまない」

ローラン、鳴ったスマホを手に取りクロスへ背を向ける。

騎冬　「……ローラン」

クロス　「……」

クロス、騎冬の呟きを聞き、警戒した素振りを見せる。
ローラン、通話を終えクロスへ向き合う。

ローラン　「No.1から直々のお呼び出しだ。
全く、挨拶は終わったつもりでいたんだがね」

クロス　「……そうでしたか。では、さっさと済ませてしまいましょう。
あまりデイを待たせすぎると、機嫌を損ねてしまうかもしれませんから」

ローラン　「確かに、そうだな。なら、余計に急がなくては」

ローラン・クロス、その場を去る。

騎冬　「なんであいつがここに……。っ！　秋愛！」

騎冬、その場を走り去る。

④パーティー会場『ホール』

デイ・秋愛、向き合って会話をしている。

デイ　「どういうことなのか知りたそうな顔ね」

秋愛　「それは、まぁ……てっきりイベントって、マジックショーとか、そういうものだと思ってましたから……」

デイ　「そうね……まぁ、マジック、というよりロシアンルーレットの方が近いわね」

秋愛　「ロシアンルーレット……？」

デイ　「そう。二人の人間に似たような薬を与えて、どっちがハズレを引くか……ってこと」

秋愛　「……それって」

デイ　「正解を引けば、嫌なこと全て忘れられてハッピー。
もう一つを引けば……いえ、これ以上は言わない」

秋愛　「でも……どうしてあなたがそんなことを知って――」

デイ　「(セリフを遮るように)あーあー。それは聞かないことをオススメするわ。
あなたの為にもね」

秋愛　「それはどういう……」

騎冬　「秋愛！」

騎冬、急いだ様子で秋愛の元へ走ってくる。

秋愛　「騎冬さん？！」

騎冬　「今すぐここを出るぞ」

秋愛　「え？　な、なんですか？　急にどうしたんですか？」

騎冬　「話は後だ。とにかく早く……！」

デイ　「……あぁ、なるほど。その人がバディってことね」

騎冬、デイに気付き警戒するように秋愛を背に庇う。

騎冬　「……誰だ」

秋愛　「あ、騎冬さん……！　その人は……！」

デイ　「ご挨拶が遅れてごめんなさい。けれど……そんなことより、早くここを出た方がいいと思うわ。出来れば今すぐに」

騎冬　「……どういうことだ」

クロス　「――デイ！」

クロス、走って登場。デイを庇うように立ち騎冬を睨む。

騎冬　「お前は……！」

クロス　「うちのレディになにか？」

デイ　「やめなさいクロス、別に悪い人達じゃないわ。むしろ、彼らは『こちら側』の人間よ」

クロス　「……へぇ」

デイ　「って、本当にこんなことしてる場合じゃない。早くここを出て」

秋愛　「どうして？」

デイ　「それは……」

ローラン　「――おや」

ローラン、歩いてやってくる。

ローラン、立ち止まる。

ローラン　「ここにいたのか」

デイ　「……ローラン」

ローラン、デイの元へ近づいて行く。

ローラン　「クロスに君を探しに行くようにと言いつけたが、まさかこんなに早く見つけるとは思っていなかった……ん？」

騎冬、ローランを睨みながら警戒を強める。

ローラン、騎冬と秋愛を見て物珍しそうに笑う。

ローラン　「そちらのレディと紳士は、君のご友人……かな？君に彼らのようなご友人がいるとは知らなかった」

デイ　「……まぁ、そこの彼女はそんな感じ。彼は彼女のお連れ様らしくてね。さっき初めましての挨拶をしたところよ」

ローラン　「ほう、そうか……」

ローラン、何かに気づいたように辺りへ視線を向ける。

デイ　「ん？　どうしたの、ローラン」

ローラン　「デイ。私とクロスの後ろから出ないように」

デイ　「え……」

突然辺りで銃撃戦が始まる。

秋愛　「え？！」

騎冬　「なんだ？！」

デイ　「あ～……だから言ったでしょ、早くここを出た方がいいって……。
もう、だから私このパーティーには来たくなかったの……！」

ローラン　「すまないね、君まで巻き込むつもりはなかったんだが……」

クロス　「お二人とも、今すぐここを離れましょう。こちらに飛び火が来る前に……」

デイ　「もう遅い気もするけど……」

騎冬　「秋愛、行くぞ」

秋愛　「え、あ、はい！」

騎冬・秋愛、走り出す。
秋愛、咄嗟に立ち止まりデイへと振り返る。

デイ「またね、トキエ」

騎冬「秋愛！　行くぞ！」

秋愛、騎冬の後を追って走り去る。

ローラン「さて、デイ。君は安全な場所へ移動しなければ」

デイ「言われなくてもそのつもりだから安心して。クロス」

クロス「はい、ご案内致します」

デイ「えぇ。早くしないと、ローランまで銃を取り出すわよ」

クロス「それは困りますね、急がないと」

ローラン「おや、私が銃を扱うのは好まないか？」

デイ「あなたは一度使うと容赦ないから……もういいから早く行きましょ。
それとも、私があなたをエスコートした方がいいのかしら？」

ローラン「いや、私はされるのは好まないのでね。遠慮しておくよ」

デイ「あらそう。じゃあクロス、行きましょうか」

クロス　「はい。お二人とも、どうぞこちらへ」

ローラン・デイ・クロス、その場を立ち去る。